

前鬼裏行場の倒木処理と第28磨「前鬼三重滝」看板設置

◇実施日：2020年6月7日（日）晴

◇参加者：沖崎吉信、濱野兼吉、中前偉、大江加予子、畑林清子、
生熊千満子、松本吉殖、山川治雄、岩本信行、高階鈴
子、志岐敬、梶野照雄、植平修

13名

一昨年の夏、梶野君は単独で出向き、垢離取場まで10数本の倒木を処理したが、その後の台風などで新たな倒木が発生し、今年の2月2日に山川、岩本の両氏と3名で処理に向かったが、予想外の大物に苦戦し、燃料も底を尽き、かなりの数を残してきたようだ。6月7日に再挑戦すると連絡があった。4月以降、コロナの影響で会行事を自粛中であるが、主だったメンバーに声を掛けたら、たちまち13名が集まった。

この際同時に摩看板を設置すべく、村吉さんに発注、前日下北山村役場の山川君に届けてくれる手配を整えた。

当日朝6時半、沖崎宅を出発し、途中役場に立ち寄る。標板、杭、ネジの3点セットと思いついでいたら、標板のみだ。最近杭の太さがマチマチなので、ネジの長さも違うことから、ネジの購入と杭の穴あけは見嶋さんをお願いしていたことを忘れていた。今日は杭を立てての取り付けは出来ない。再度訪れて設置することになる。

最近何かを忘れたりのチョンボが多くなった。



小仲坊で出発準備



関伽坂峠に着く



2月に切除した大木



垢離取場に到着



倒木切除



3台のチェーンソーで処理

スポーツ公園で高階鈴子さんが同乗し、前鬼林道のゲートに向かう。定刻の8時半前にゲート着、植平さんのみ到着していた。聞け

ば前泊したとのことである。程なく山川、梶野車も到着し、小仲坊へ出発する。



20分ほど作業

小仲坊で五鬼助さんに挨拶、各自準備を整え裏行場へ向かう。

「ミツマタ」が元気いっぱい枝を広げているので、かき分け、かき坂峠に着き一服。倒木があるのは垢離取場の先とのことで、短い休憩の後先に進む。出発してすぐ、2月に難儀して処理した大物の横を通過する。裏行場へは過去4〜5回訪れたことがあるが、山彦の行事としては記憶にない。今日参加された皆さんの半数位は初めてらしい。4〜5回来た、と言っても10年以上前の事なので、この下りの長さや足場の悪さなども忘れていて、ひよつとして帰りはこれを登ってくるのかヨ、と思いつつ垢離取場に着く。いつ来ても水がきれいな澄んでいて、周りの雰囲気も最高だ。水量が多くて渡ることが出来なかったり、靴を脱いで渡らないといけなかったりするこ



切除後の状態

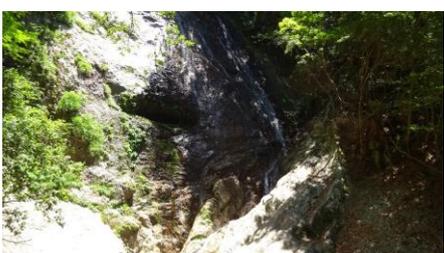


チェーンソー2台で

とが多いので、ザイルも持参していたが、水量は少なく浅瀬を靴のまま歩ける状態で、特別な用具は要らなかった。10数年前、パンツ一枚で泳いだことを思い出す。まさしく垢離取行だ。

垢離取場を過ぎて裏行場への途中、大物が2本、道を塞いでいる。内一本はヒメシヤラの大木で、全長は25mほど、枝も相当大きく広がっている。この木の処理は、植平、山川、梶野、志岐のチェンソー班4名に任せて先に進む。滝への下降手前は道が少々荒れ気味で足場も悪く、数名が登山道を見失うことがあった。

古い木段が残っているが、急勾配なので下りで間違うととんでもないところに降りてしまう。次回に対応を考えている。



10分で完了

千手の滝に到着

胎蔵界窟で勤行

急こう配を登りきると、滝までは鋼鉄製の階段が設置されている。昔は木製の梯子で、かなり慎重に降りた記憶があるが、世界遺産登録後に付け替えられたようで、現在は安全に降りることが出来る。前鬼・三重の滝は、上から馬頭の滝、千手の滝、不動の滝の三連

瀑から成り「密行所」と呼ばれる前鬼の裏行場である。鎌倉時代の初期、西行法師も訪れ「身につもる ことば罪もあらはれて 心すみゐる みかさねの滝」と詠んでいる。



胎蔵界窟の役行者像

本日の参加者

滝の水を味わう

千手の滝の下部、不動の滝の落ち口に着いてチェーンソー班の到着を待つ。その間周囲を眺めながら、こんなところを誰が見つけて、どんなふうにあそこを降りて、誰が梯子を掛けたり管理してきたのか、などの話になる。余談であるが、森沢さんの著書「大峯75摩」に大正時代の初め、岡山県に信仰団体「福田海」（ふくでんかい）と言う組織があつて、若者15名が小さな小屋を建てて6月から70日間滞在、裏行場新道を開削した。江戸時代に生まれた福田海の創設者は修験道の影響を受け、全国各地で福田（ふくでん）を行い「積善・陰徳」を主義として【決して奢らず、語らず、利他行を進めてきた】とある。彼らの思想や行動は我々ぐるーぷも大いに模範とすべきである。（福田海で検索してください）

30分程でチェーンソー班が到着。無事に処理完了したとのことだった。全員が揃い上部の両界窟へ向かう。千手の滝を中間から眺めるテラスに出ると、胎蔵界・金剛界の二つの窟がある。

滝のしぶきを浴びる左手に「胎蔵界窟」があり、前鬼、後鬼を従えた役行者銅像が安置されている。間口4m、奥行き3m、高さ2mで、底辺の面積は三畳くらいの広さがある。10mほど右に「金剛界窟」があるが、こちらは賽の河原の積み石があるだけだ。全国に行場と呼ばれている所は多数あるが、行場中の行場らしいと思うのは私だけではなく、皆さんもその神秘性で、ここを秘所と感じているだろう。植平さん導師で心経を唱えさせて頂いた。

植平さんから、この両窟は長い時間をかけて少しづつノミを入れて現在の姿になったのだらうとお聞きした。更に、植平さんから、この千手の滝横に屏風の横駆、その上方に天の二十八宿と呼ばれる行場があり、現在でも一部の行者が修行されているが、昔は下段の不動の滝横に梯子があり、天に対して「地の三十六禽（きん）」と呼ばれる行場、不動の滝下にも三宝荒神の滝、日光月光の滝、手水滝、大師の関伽井、大黒窟、行者の関伽井、弁天森、梵天の滝、東の覗などの行場が続いていたとお教えいただいた。

宮家準氏も大峰山中の最上の密場として特に重視され、釈迦ヶ岳、深仙宿と共に峰中の三大行場の一つに数えられる聖地であると記している。

千手の滝まで戻って昼食とし、靡看板を立木に仮止めして下山を始めた。帰路もチェーンソー班は気になる所で処理を行った。

垢離取場から関伽坂峠までの途中の崩落地にある斜木は直径が50cmを越える太さで、切断に時間がかかるので今回処理は見送った。



思い思いの場所で昼食



仮止めた靡看板



帰路でも倒木処理



帰路でも倒木処理



小仲坊に帰着



靡看板は仮設の状態なので、杭とネジを持って再度設置に向かう必要がある。処理しきれなかった斜木の処理と靡看板の設置に再びのご協力をお願いしたい。

今回初めて裏行場を訪れた方からも、再度訪問したいとの声がありました。

(記；沖崎 写真；梶野・志岐)

行動タイム

08：30前鬼林道ゲート08：42小仲坊08：56→09：23関伽坂峠→10：00垢離取場→11：20千手の滝→11：28胎蔵界窟11：37→千手の滝12：30→13：25垢離取場→14：29関伽坂峠→14：52小仲坊